

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

＜書評と紹介＞ 木村礎・藤野保・村上直編 『藩史大事典』第二巻 関東編

著者	根崎 光男
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	43
ページ	126-127
発行年	1991-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10412

〈書評と紹介〉

木村礎・藤野保・村上直編

『藩史大事典』第二巻 関東編

根崎 光男

戦後、歴史学研究は飛躍的な発展を遂げている。藩制史研究も例外ではない。幕藩制社会の支配体制が幕府と藩との二重構造を軸として成り立っている以上、全国土の大半の領域を占めた藩の存在が無視しえないのは明らかである。近年、この分野も個別藩研究が深化の一途をたどり、その総体的把握は困難な状況にある。全国諸藩は江戸時代二七〇年の間に廃絶・分立・新規取り立てなどの変動を繰り返して、そして城地や領地の拡大・縮小、移動などがあって、その構造は複雑であり、強力な藩権力を行使しえても、知行宛行・改易・転封権などの強大な幕府権力によって、新たな幕藩関係の再生産を余儀なくされた歴史を有している。一口に藩（大名）といっても一様ではなく、国主・城主・城主格・無城主などの格差、親藩・譜代・外様の別、江戸城中での詰間（席次）の違いなど、さまざまな序列があった。

藩領域の支配の実態となると、各大名の政治姿勢・藩領の地域性によりさらに複雑である。一般に近世を通じて一つの藩には数人の大名が移封されるのが常であり、それぞれの大名によって支配のあり方も異なってくる。このため藩領民は各大名に刻み込まれた藩政の歴史をもったのである。逆に大名もまた各地に移動さ

せられることによって、地域性の壁をのりこえながら、紆余曲折の家の歴史を形成することになる。わが国の藩（大名）権力の歴史的特質は、これら個別藩（大名）研究を土台としてその全体像のなかから普遍性を追求していかねばならないのは自明の理であるが、現在の研究状況からいって近世全期のすべての藩をおしなべて均質に把握することは難しい。

その意味で、全国諸藩五八一藩を網羅解説した『藩史大事典』全八巻の刊行意義は大きい。実はこの事典は一〇余年も前に本学の村上直教授や卒業生らが構想し、その基礎作業を進めたものである。全国各地の藩所在地の公立図書館や研究機関に、各藩研究の現状を把握するためアンケート形式で調査を実施し、それを整理集計する作業は困難をきわめたにちがいない。この間も藩史研究は広範な展開をみせていたが、最新の成果を盛り込むため木村礎・藤野保両氏を迎え、村上教授との共同責任編集という形で新たな陣容を整え、この事典の刊行が実現の運びとなったというから、大事業にかけた関係者の熱意のほどが察せられよう。

全八巻の構成は、北海道・東北、関東、中部Ⅰ、中部Ⅱ、近畿、中国・四国、九州の七巻と史料・索引編から成るが、ここでは第二巻の関東編を例として、この事典の内容と特徴を紹介したい。

まず藩の名称は城地・城名で示し（別称も並記）、藩の概観としてその歴史を略述、次いで藩主の系図と姻戚関係、家紋、藩主歴代一覧（藩主の生没年、藩主就退任年、幕府役職、石高や所領の変遷を含む）、藩史略年表など、各藩の基本的事項が簡便にまとめられている。続いて家老とその業績、職制、領内・領外（飛

地)の支配、村役人の名称、領内交通路、番所・津出場・米蔵の所在地など、領国支配の特徴や領内の地域状況が記述されている。さらに江戸城の詰問、江戸その他の屋敷および蔵屋敷の所在地、藩の専売制、藩札、藩校、藩の学芸・武術、参勤交代、そして藩の基本史料や研究文献等々、全二五項目にわたって盛り沢山の内容となっている。藩の政治・経済・文化・地域的特性が項目ごとに整理されているので、見やすく利用に便利で、その全体像が瞬時のうちにはほぼ把握できる構成となっている。まさに画期的な藩史研究のガイドブックといつてよい。但し、個別藩研究の進展度や執筆者の偏差によって、その内容に精粗があるのは否めない。しかし全国のすべての藩の歴史を幅広く画一的に網羅集成するという困難に挑み、今後の藩史研究の基礎素材を均質に提示した点で、その有用性が認められよう。

こうした内容に沿って第二巻の関東編には関東八か国(現在の一部六県)に存在した諸藩の歴史が収められている。常陸国(茨城県)二四藩(うち中途廃絶一〇藩、下野国(栃木県)二三藩(同一一藩、上野国(群馬県)一九藩(同九藩、下総国(茨城・千葉県)二〇藩(同一〇藩、上総国(千葉県)二四藩(同一〇藩)、安房国(千葉県)七藩(同四藩、武蔵国(東京都、埼玉・神奈川県)一七藩(同九藩、相模国(神奈川県)四藩(同二藩)。このように、関東には近世を通じて一三八藩が存在したが、実にその半数にあたる六五藩が中途廃絶し、明治維新まで生き残れなかったわけである。これは幕府権力の強大性や藩(大名)の存廃の激しさと同時に、そのもとの民衆の苦難とたくましさ

書評と紹介

を改めて考えさせるのに十分である。

なおこの事典の画期的なことは個別藩の動向がわかるだけでなく、利用の仕方によっては大名の幕閣の参画状況とそれを生み出す藩(大名)の幕閣における位置、そして大名の移動を追っていくと領内支配の特徴なども窺知できることである。つまり使い道によってさまざまな模索ができるのも、本書の問口の広さを物語っている。

現在、日本近世史研究は分野研究が定着し、細部に深化していく傾向にある。それは一つの方向であるとしても、いずれはそれらを基礎として体系化していかなければならない。その点で近世における全藩の歴史と研究成果を共有財産として利用者に等しく提供したことは、本書の功績の一つである。その意味で藩史研究にとどまらず、近世史研究の進展に大いに寄与するものと確信する。刊行に尽力された編集者・執筆者の方々の労に敬意を表するとともに、本書が各方面に愛用されることを願ってやまない。

〔一九八九年一月刊 一五、五〇〇円 B5判 七〇六頁

雄山閣出版〕

藩史大事典 全八巻

藩史大事典は、第一巻は北海道・東北編、第二巻は関東編、第三巻は中部編Ⅰ(北陸・甲信)、第四巻は中部Ⅱ(東海Ⅱ三重を含む)、第五巻は近畿編(三重を除く)、第六巻は中国・四国編、第七巻は九州編、第八巻は史料・文献総覧・索引から成っている。